

「石ころ」たることを捨て「巻き込み巻き込まれ」を フィールド・ワーカー 目指す現地主義研究者の来し方にふれて*

岡部 正義

近代合理主義が様々に再考と止揚を迫られる現代にあって、現今のコロナ禍は改めて我々に自らの身体性を従たるものには決してできないことを如実に突き付けてきた。開発学（中西徹氏）と建築学（岸健太氏）の見地から東南アジアのフィールドとの往来を長きに亙り続けてきた両氏論考の随所には、偶然とは言えぬほどに共通したフィールド観——そして社会観——が示されている。決してこれは、昨今、グローバル化に伴って「ローカル」が覚醒を迫られるという平板な受動的議論ではない。それは、対象に極めて徹視的かつ詳細に接近し、人びとの身体性・日常性・主体性が束となって現地で営々と築かれた「知恵」¹あるいは「戦略」に対して、中西氏の過去の著作の表現を借用すれば「一種恐れにも似た慎重な配慮」[中西 1991: 21]が通奏低音として響き渡り、岸論考では「『生存の知技』=社会を生きるための知と実践の技」の模索に示されている。

両論考が論じるフィールドは、中西論考が再考を迫る「方法論的ナショナリズム」的に見れば、確かに国家内部の一つの小社会に過ぎないかもしれない。しかしそれこそが、グローバル、国家、政策科学といった高次の次元で要素還元主義的には捉えきれない人間社会の在り様であり、岸論考がオースターによるカルへの手引きで引用した内容のように、具体性と顕名性があり、身体性が発露する日々の地域的かつ身体的な実生活が営まれる場^{トボス}であろうし、そこから我々の心身は決して遊離できない。

* 本稿では一人称に「筆者」ではなく「私」を用いる。執筆にあたり科研費（20K22248）の助成に基づく議論の一部採用している。記して感謝したい。

¹ 岸論考が「土地々に固有の生活知」、中西論考がJames C. Scottに倣い「民衆知」(*mētis*)と呼んでいることも偶然の一致とは思えない。

両氏は自らの身体を極めて積極的にその「場」に動員し、そこに「関与」する。「自分自身の参加と身体感覚で」と言明する岸論考では、例えば、TBカンポンの住民運動の手段としてミュラール（壁画）展が提案され、その表現方法に現地の政治性に思慮をともなった提案と関与を行ったこと、さらに氏も参画する OHS からアートプロジェクトに対し多様な協働者が現れ、他のカンポンにまで水平的広がりを見せたことが報告されている。中西論考では、調査地スラムが抱えてきた土地問題をめぐるとの「戦略」と、同地が外部篤志家の経済的・人的資源にその時々アドホックに依存する構造から脱却し自立するために、共同体内部に相応の能力を持った人材を育成する教育支援プロジェクトが紹介されている。さらに、氏自らの関与に留まらず、フィリピン大学准教授となった Kerby Alvarez 氏のような人物を育て、彼もまた関与し、難関大学合格者を輩出する支援活動を展開したことも詳細に述べられている。これらは、現地の人びとを「巻き込み」、自らも「巻き込まれ」てきた弛ま^なないプロセスとして圧倒されるものである。

尤も、同時に、中西論考が「石ころ」と隠喩する「研究者にとってはオーラル・トラディションとして真っ先に教え込まれる不文律」は、氏をして「調査地と調査者である筆者との関係」について「研究者として不適格であったと考えざるを得ない」と省察せしめる点にも注目したい。おそらく実証主義的社会科学の大宗においては、調査者は観察者に徹するものと考えられているだろう²、岸論考でも、都市計画学においても中央からの「トップ・ダウン」と「計画性」が主流のアプローチであり、氏は「都市計画」に代わる「アーバン・カルチベーション」や「都市育成」の必要性を指摘している。その意味で、関与に基づくフィールドとの間に築かれた長期的・緊密の関係性は、同時に氏ら自らが研究者として所属意識を持つ学問的「ディシプリン」³の規律的・計画的な主流派流儀との葛藤と応答でもあったことが明に暗に発露されている、と言ったら深読みしすぎであろうか。

実証主義社会科学が細分化して取り上げる「従属変数」「独立変数」たる諸問題が、フィールドにおいてはそのように「遊離」したものではなく、

² ただし、社会科学には認識論的に実証主義の他に解釈主義や批判的実在論があり（野村 2017）、その意味でこの限りではない。

³ 学問分野を指すと同時に文字通り、逸脱を排する「規律」も同語が意味する点は指摘するまでもないだろう。

日々の人々の命と生存を守る生活の連続体であること、そしてそのことを自身の「身体」と「関与」で解き明かす両氏の姿勢に圧倒される。確かに人文社会系の中でも、(私も帰属する) 開発学では、実務者のみならず研究者にとっても、「外」からの理解や観察とそれに基づく政策提言のみならず積極的な関与(あるいは参加)が欠かせないという議論が比較的^{ひつ}に共有されている。しかし実際に実現するかどうかは、能力・意志・時間・費用、そして畢竟^{ききょう}、各研究者の研究者人生の設計^{うかが}そのものに照らして「言うは易し、するは難き」である。両氏の来し方から窺^{うかが}い知る「開かれた人文知」は、自らを規律^{d i s c i p l i n e}してきたものとの緊張や葛藤と、身体を動員した不断の関与・応答による半生の上にあることを痛感し、研究者キャリアの緒に就いたばかりの私は自らの行先にも思いを馳せるものである。

謝 辞

本稿の執筆にあたり、各論考著者に加えて、Sarah R. Asada 准教授(共立女子大学国際学部)よりご教授を頂きました。記して感謝申し上げます。

参考文献

中西 徹. 1991. 『スラムの経済学』東大出版会.

野村 康. 2017. 『社会科学の考え方: 認識論, リサーチ・デザイン, 手法』名大出版会.